

広島大学第43回東京イブニングセミナー

- 日時: 2012年7月20日(金) 18:30 ~ 21:00 (受付 18:00~)
- 場所: 東京都港区芝浦3-3-6 キャンパス・イノベーションセンター(下図参照:JR田町駅 芝浦口 徒歩1分)
- 費用: 講演会・無料、交流会・2,000円(当日支払い)
- 主催: 広島大学(東京オフィス、社会連携推進機構)

■講演プログラム

1. 18:30~18:35 講師紹介 1階国際会議室
中島 修【東京オフィス 所長】
2. 18:35 ~18:45毎日新聞社の紹介 1階国際会議室
玉木 研二
【毎日新聞社 専門編集委員】
3. 18:45~19:45 講演・質疑応答 1階国際会議室



新聞最新事情

＜概要＞日本の新聞は明治時代に始まり、紙に印刷された活字とスティール写真で発行されてきました。取材の仕方、編集の伝統的な習わしも、基本的には1世紀以上の間変わらずにきました。

それが今、ネット時代に入って大きな変革を迫られています。それは1990年代に始まり、その後予想以上に進展しているように見えます。中でも「ツイッター」など「ソーシャルメディア」は、私が記者になったころには想像もつかないものでした。

ひとくちに言うと、今は一人一人が情報発信者になりえる時代です。昔は、個人が何か世の中に訴えかけたいという時は、手で書いたものを一部一部印刷し、苦勞して配布し、という努力が必要でした。そんな努力をしてもなかなか伝わらないのが現実でしたが、今は瞬時に自分が得た情報や考えを流布できるのです。これは情報化社会の可能性を広げるとともに、危険性ももたらしました。

こうした流れの中で「オールドメディア」である新聞はどうすればいいのでしょうか。一つには、ソーシャルメディアとの連携の道があります。例えば、記者たちもソーシャルメディアに参加し、取材の途中経過などを随時発信し、反応を得ながら記事に反映させる、といったような手法です。実際にこれを試みている新聞社があります。

また東日本大震災の際、被災地の記者たちがこのソーシャルメディアで情報をどんどん発信・受信し、とても効果があったといわれています。

いずれにせよ、昔のように新聞など限られたメディアが情報を優先的に得たり、特権的に取材したりする時代は去りました。また新聞という媒体も、活字印刷の紙だけではなく、読者との双方向性を持った新電子媒体へ積極的に進出しています。

私が記者になって37年になります。新聞業界を取り巻く風景はすっかり変わりました。ただ、情報を選び、判断し、発信するのは機械ではなく人間であり、価値観や情熱といった要因が大きいのは昔と変わりません。

こうした変転を体験を交えながらご紹介し、新聞のこれからを考えたいと思います。

4. 19:50 ~ 21:00 交流会 5階 リエゾンコーナー508

- お申込み方法: 添付の「参加申込書」に所定の事項を記入頂き、FAXあるいはE-mailにて下記までお申込み下さい。(定員 100名)

申込み・問合せ先

広島大学東京オフィス
東京都港区芝浦3-3-6
キャンパス・イノベーションセンター409号室

電話: 03-5440-9065

FAX: 03-5440-9117

E-mail: liaison-office@office.hiroshima-u.ac.jp

